



関学 125 年記念誌こぼれ話 ～ミモザと蔵書の行方～

古川 彰

125 周年の記念誌『Gift for the Future 未来に贈る 125 年 1889-2014』編集計画の当初には、日本史の時間、世界史の時間の 2 軸がなす平面に関学固有の時間軸を加えた立体とし、それぞれの時間軸を5つに区切って 125 のテーマを考えてみようかというアイデアもあった。しかし、博物館の展示と記念誌とをリンクさせるためには 125 のキューブの相互連関をもたせることがかなり難しいことが、早い段階でわかって断念した。とはいえ、その 3 つの時間のなかに関学の現在を位置づけるというアイデアは最後まで編集の基本コンセプトとなっていた。

ただこの時間軸という、年史では外せないコンセプトは、時間軸をぬけだしたときに「関学」という場から自由になろうとするヒトやモノやコトやコトバが織りなすさまざまなエピソードが入れない壁にもなる。そうしたエピソードが生きられた関学のゆたかな歴史を織りなす糸であるかもしれない。

キャンパスにかつては銀座通りと呼ばれる通りがあったこと、関学の中を流れる上ヶ原用水の分水や、ほんのすこし前になくなったラン食堂など関学がこの地に移ってきてから開店し、そして閉店していった多くの店、甲東園から関学までの曲がりくねった道など、たくさんのが気になって仕方なかった。それで関学が移る前からの地形図を探していると、教育学部の A 先生が古い地図を集めておられることを聞き知ってお借りすることができた。それらを並べて、関学の中央芝生に自分をおいて上ヶ原キャンパスの変化を感じることができるようになった。



今回は戦後すぐの関学の場所と教員とその教員の蔵書の行方を追ってみよう。

昭和 24 年、戦後最初の芥川賞作家となった由起しげ子の『本の話』(以下、小説の引用は日本ペンクラブ 電子文藝館から)は次のように始まる。「私の義兄、白石淳之介はその年の二月一日、静かな晩、神戸市外のK病院の一室で五十八歳の生涯を閉じた。病名は喉頭結核であったが、事実は栄養失調であった」。東京から兄の電報を受け取り、友人からお金を借りてやってきた「私」は、病気で入院していた姉ではなくその看病で衰弱した義兄を見送ることになる。

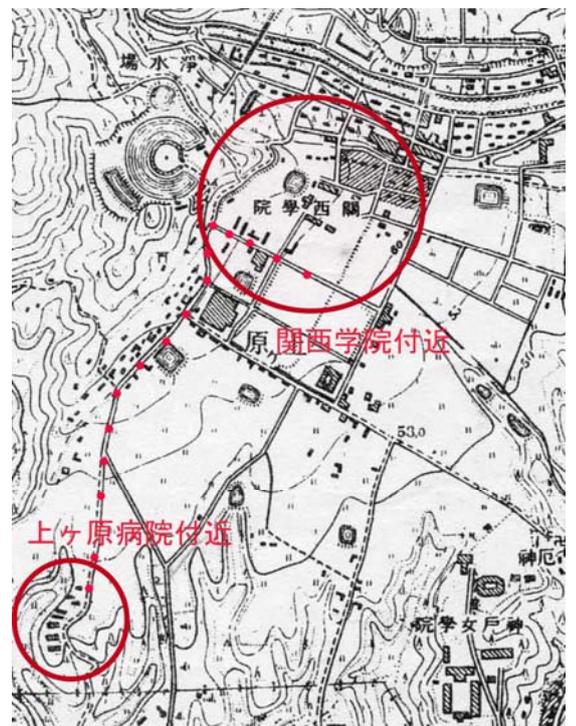
K 病院で闘病生活を送っている主人公「私」の姉の夫である白石淳之介のモデルは、関西学院高等商業学部(商学部の前身)教授・馬淵得三郎【写真左:1937 年卒業アルバムより】である。そして彼が妻の看病に疲れて亡くなる K 病院(小説中では療養所とも書かれる)は、現在の上ヶ原病院(もとクリスト・ロア病院)で、小説の中では「松林をきり開いて山の上に建てられていた」と描かれている。

1933(昭和 8)年、上ヶ原十番町に 結核療養所として建てられた、カナダ系の「王たるクリスト宣教修道女会」経営によるクリスト・ロア病院は、その後、接收されて川西航空機の明和病院分院となる。そして昭和 46 年には修道女会の手をはなれ、その後、上ヶ原病院になる(南野武衛「上ヶ原台地と由起しげこ」『宮っ子』No. 9, 1980.7)。

『本の話』に戻ろう。義兄の葬儀後のこと。「私」はまだ姉の看病を続けている。

「その夜私は姉が寝入ったすきを窺い療養所を抜け出した。あにが勤めていた学校の庭にミモザが咲いていたことを思い出し、それを盗みに行こうと思ったのだ。山裾の畑道を学校の方へ歩いて行くと黒々と海をふちどったN市の燈火が火の粉を散らしたように見えた」。

もちろんいまでは上ヶ原病院から大学への道に、そんな風にし西宮の明かりが見える場所ほとんどない【右:1947 年版地形図参照】。



「裏門から校庭へ入って行くとユーカリやさわらや檜などが枝をさし交して星空を遮り、まっくらで何も見えなかった」。

関学の裏門というのはどのあたりだろうか。当時の地形図をみると、左下の上ヶ原病院から北上する道がありそれを辿って池を南東に見ながら浄水場から南北のキャンパスの間を通る道を東に向う北側のどこかのはずだ。現在、この周辺にユーカリは4本ある。まず、大学院1号館(キャンパスマップ③)東の石門(移築された旧原田の森キャンパスの正門)横、次にD号館(④)東、さらに商学部(⑦)南の駐輪場(⑥)に2本(建物近くと歩道上)。いずれかのユーカリのそばにさわらや檜が植えられ、星空を遮る程枝を伸ばしていたのであろう。

「私は手さぐりで一本一本下枝をさぐり、柔い群花の手ざわりや匂いをさがしたがもすこし粗くて痛い葉を何度かつかまねばならなかった。だがとうとうその粗い葉の小枝の中にかくれているカナリヤの胸毛のようなミモザの花をつかまえた。顔をもってゆくとつつまれるような懐しい匂いが胸をひたした」。

このミモザは吉岡記念館(③)の西側にいまもあるミモザだとされている記事を時々みるが、あの商学部周辺のユーカリの木から中央芝生の東側を越えて吉岡記念館まで「一本一本下枝をさぐり」ながら行くような道だったとは思えない。おそらくは商学部の前の大きなユーカリの木の藪のあたりにミモザがあったのではないだろうか。やはりそれとも今とは建築の配置がまったく異なるのだろうか。

そして、「私は一本のミモザの枝をかかえ、二十九年義兄の精魂がそこにあった美しい校庭に別れを上げた。ミモザは病室の片隅の瀬戸の水差しにさして東京に帰った」のだが、姉の病状は回復しないままで、だからと言って「学校の講義は十一月末迄一度も休まずに続け、教壇でたおれそうになり強制的に病妻と同じこのK療養所に收容されるまで、学生同僚の救援を固辞し、親戚知人にも語らなかつた」義兄に蓄えがあるはずもなく、病院の治療費が底をつき始める。

そこで「いよいよ、義兄の唯一の遺品である本に手をつけなければならぬ場合であった。義兄の本は戦災で焼いた残りが六百冊ばかり東京の武石の会社の倉庫に箱詰になって残っていたが、これを売って金にかえるなどということは誰一人考えて見るものもないくらいだった。それは義兄の生前の意志として本は一纏めにして郷里仙台の学校か然るべき施設に寄贈して後人の利用にゆだねたい、ということが姉の執拗なほどの度々の言明によって関係者は周知していたし、故人の生涯がひたすら本の中に埋めつくされたことを知るものには、これは全く正当なことに思われたからであった」とはいえ、もうその本のことを考えるより外には手段はなく「私」は本の処分をいろいろな人にお願ひし、ようやくある保険会社が買い取ってくれそうになる。しかし、本を整理するうちに「私」は、「これらの本は保険関係の会社等に入用なものではなくて、これを専攻する学者だけに必要なものらしいことを感じて」もいた。そこで義兄の望んだ仙台の大学の義兄の知り合いに引き取ってもらえないかと手紙を出したりもする。

『本の話』の最後のほうで、ポナールの複製画を見ながら、「私」は「この絵の場の一つ一つを占めている描かれたものの重要さ、描いたものの愛情が、秩序というものを身にひき添えている好もしさにまったく引き入れられてしまった」。

「それは、その絵がそのうしろに持っているフランスという国の豊醇で濃密な文化のすがたをありありと泛べていた。その組成である複雑な一つ一つの素材がどんな綿密さでつながり合い、その文化を支えているかと考えさせずにいなかった。私は絵の残像の絢爛さのなかに数百冊の海上保険の本を浮びあがらせた。そして日本人が専門と日常生活とのつながりをどんな浅いところにしか持っていないか、ということを改めて

しみじみと考えた。原子物理学や実存主義や、時々流行の慌しい潮流の上をかすめて熱狂はするが、目だたない底の営みは置き去りにされてゆく。」そして「私は二十九年その学問への情熱をうずめつくして病妻一人を養えなかつた義兄のことを考え」るのだ。

義兄の本はどうなったのか。この小説では、



キャンパスマップ

その最後の行方は書かれていないが、なんとなく仙台の大学の義兄の知り合いの教授に買い取られるのではないかと暗示させるように書かれてはいる。しかし、馬淵蔵書の行方を追っていく内に、海事保険関連の財団である山縣記念財団(1940年設立)の事業報告書の中に次のようなことが書かれていることを知った。

「平成 17 年 6 月、流通経済大学図書館宛、当財団の蔵書の内、海事関連を除くもの(約 5 千冊)を寄贈した。この中には、馬淵得三郎氏より寄贈された『保険』分野の洋書の一部も含まれる。今後は、当財団蔵書の内容を海事関連に絞って運営していく方針である」(山縣記念財団、2005 年度事業報告書)。

ちなみに東京中央区にある山縣記念財団のおおもとは、江戸に醸造酒を送っていた辰馬家が明治 18 年に設立した「辰馬回漕店」である。それが後に「辰馬汽船合資会社」から株式会社へと展開し、同時に海上火災保険の代理店業務にも進出して「辰馬海上火災保険」を分離設立している。そして「昭和 15 年 6 月、当時辰馬汽船の社長であった山縣勝見は、同社の常務取締役であった松本一郎とともに、将来の日本海運発展のため産学協同の理念の下に、学理と実務の統合的機関を設けることを企図して「財団法人 辰馬海事記念財団」を設立し、のちにそれが「山縣記念財団」となる。馬淵得三郎先生の蔵書は、おそらく学術的にも地理的にもゆかりもあり、早くから産学協同を標榜して設立されたこの財団に引き取られたのではなかっただろうか。

今回のこぼれ話は、上ヶ原病院から出発して、関学のキャンパスをめぐる地図の話でまとめるはずだったが、いつのまにか関学の教員(それも蔵書)の行方を追うことになった。こうしたことのひとつひとつは関学の正史になることはないかもしれないが、生きられた関学の姿だから、ひっそりと記録しておくといいたいだろう。そこでこのエッセイでは、編集のプロセスで落としてきたさまざまなこぼれ話をこれからすこしずつ、誰とすることなく書いておくといいと思う。

【社会学部教授、大学博物館副館長】

- ・日本ペンクラブ 電子文藝館、由起しげ子『本の話』 <http://www.japanpen.or.jp/e-bungeikan/novel/yukishigeko.html>
- ・山縣記念財団 沿革 <http://www.ymf.or.jp/db/>
- ・植村達男『保険文化の森を散歩する(電子書籍)』(株式会社保健教育システム研究所、2012 年発行)は、馬淵得三郎の保険関連業績について詳しい。
- ・『関西学院事典』(増補改訂 WEB 版)「スケート部」の項に、1923 年に「馬淵得三郎教授を部長、A. C. ブラッドレー教授を指導者としてスケート部が発足した」とある。

資料紹介

本年 4 月、学院史編纂室に異動して以来、十分な整理がなされないまま資料庫に保管されてきた資料の整理を進めています。その中から、今後の活用が期待される次の 2 点を紹介します。

(学院史編纂室 神田孝一)

◆平塚家文書

この文書について、社会学部教授をされていた大道安次郎先生は次のように説明されている。「さきごろ関西学院大学社会学部の社会学研究室は、一つの貴重な『文書』の寄贈をうけた。それは宝塚市の旧良元村の旧家で、宝塚開発に不朽の足跡を残した平塚嘉右衛門氏の遺族の方から贈られた同家保存の文書のことである。私達はその好意を感謝し記念するために、それを『平塚家文書』と名づけたく思っている」(『平塚家文書目録』について—宝塚開発関係資料—『社会学部紀要』第 4 号、1962 年、97 頁)。

この資料が財務部から学院史編纂室に届けられたのは 10 年ほど前のことだったようだ。それらは文書箱に移され、資料庫に置かれていた。これとは別に、数年前、経済学部倉庫から預けられた段ボール箱の中に、この資料の一部が含まれていることがわかった。契約書、図面、会計台帳、土地登記簿…。当初、これらが一体何を意味するのかよくわからなかった。半世紀以上前に大道先生が作成された目録を見つけ、それを頼りに整理を進めた。

平塚嘉右衛門氏は、阪急電鉄の小林一三氏と並んで、宝塚開発に大きな貢献をされた方であった。宝塚市は両者の功績を讃え、花の道に小林氏の顕彰碑、宝塚聖天(七宝山了徳密院)に平塚氏の顕彰碑(頌徳碑)を建立した。今後、この資料を用いて宝塚開発の研究が進むことを期待したい。

◆藤田允氏遺品

関西学院の国際交流に多大の貢献をされた藤田允氏は 2005 年 11 月 20 日、アメリカのルイジアナ州で亡くなられた。学院史編纂室に届けられた遺品(主に写真アルバムと海外からの書簡類)は段ボール 15 箱に納められた。それらを利用してもらいやすいよう、整理した。

周知の通り、藤田氏は笑顔の絶えない方で、アルバムのどのページを開いても笑顔の藤田氏【写真】に会える。若い頃は相当痩せておられたのが新しい発見であった。

